

所属・資格 英文学科・教授

申請者氏名 飯田 啓治朗

研究課題		シェイクスピアと精神分析理論
報告の概要	研究目的 および 研究概要	本研究は、精神分析批評の立場から、初期近代イギリスの劇作家、詩人、俳優であったウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の作品の新たな解釈を提示することを目的とする。精神分析学の創始者、ジークムント・フロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) は、彼の精神分析理論を展開する著作において、『ハムレット』(Hamlet, 1600)をはじめとして、シェイクスピアの作品に言及している。また、フロイトの後を受けて、アーネスト・ジョーンズ (Ernest Jones, 1879-1958) やオットー・ランク (Otto Rank, 1884-1939) は、現在に至るまで続いている精神分析的なシェイクスピア研究の端緒を開いた。本研究では、精神分析理論を援用して、シェイクスピア作品の考察を行なう。
	研究の 結果	シェイクスピアの四大悲劇の最後の作品で、1606年の創作および初演とされる『マクベス』(Macbeth) に関して、20世紀後期の批評を研究した。主なものとして、ハリー・バージャー・ジュニア (Harry Berger Jr.) は、“The Early Scenes of <i>Macbeth</i> : Preface to a New Interpretation” (1980) において、悲劇『マクベス』は、悪による秩序の崩壊と、その結果として生じる調和の回復を提示しているという20世紀中頃に顕著であった考え方が、この作品の善良な登場人物たちによっても共有されていることを論じていた。また、マイケル・ホーキンス (Michael Hawkins) は、“History, politics and <i>Macbeth</i> ” (1982) において、エリザベス朝時代およびジェームズ一世時代の人びとが認識していた、封建性以前の、封建制の、君主制の、そして官僚制の、4つの政治組織の形態が『マクベス』において複雑に混ざり合っていることを考察していた。
	研究の 考察・ 反省	『マクベス』に関する20世紀後期の膨大な批評のすべてに触れることは不可能で、選択的にならざるを得なかった。しかしながら、特に、キャサリン・ベルシー (Catherine Belsey) が <i>Critical Practice</i> (1980) において、精神分析学者、ジャック・ラカン (Jacques Lacan, 1901-81) の理論などを援用し、主体性の分裂をテーマとして『マクベス』を解釈している批評は、今後のシェイクスピア作品の精神分析的な研究にとって示唆に富んだものであった。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所 研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>介護の負担が増えたことにより、成果を出すことはできなかったが、今年度の研究を生かして、次の年度に日本大学英文学会のイギリス文学シンポジウム (令和7年5月24日開催) において、研究発表を行なう予定。</p>	